

持続可能な産地を目指して（後編）

～福山市新市地域を中心としたHITOTOITOプロジェクト～

I. 糸からデニムになるまで

綿から糸、糸からデニムが完成するまでには、いくつかの工程が必要となる。おおまかな工程は図表1の通りである。そして、紡績^(注1)・染色、生地製造、裁断、縫製、洗い加工^(注2)など、川上から川下まで、一貫生産が可能な産地を形成しているのが、福山市新市地域を中心としたこのエリアの特徴である。

本稿では、福山市新市地域を中心として展開されている繊維産地継承プロジェクト（以下、HITOTOITO）に参画している生

地製造、裁断・パターン、縫製等の専門会社の方々に、プロジェクトに参加したきっかけ、プロジェクトに参加してよかったと思える出来事や今後期待していることなどを伺った。

工程の川上段階にあたる生地製造を手掛ける篠原テキスタイル株式会社の篠原由起社長は、プロジェクトの活動意義と使命について、「国内デニム生地製造シェアの半数以上を占め、1枚の服を仕立てるために必要な工程を担う専門工場が集積した地域。この土地で、人の手が生み出し培われてきた技術と、人と糸が織り成してきた産地の歴史、そして作り手の想いを一人でも多くの方々に伝え、未来へつなぐ。HITOTOITOが大切に想う、活動意義と使命です」と語る。

図表1 一般的な工程



当研究所作成

① 裁断・パターンに携わるメンバー

有限会社 MILL CREATE 水成 公治 代表取締役

【プロジェクトでの担当】：裁断・パターン実技、工場見学の受入れなど



【プロジェクトに参加したきっかけ】

備後というレアなデニムの産地をもっと知ってもらいたい。ものづくりに興味のある人に、服作りの面白さを知ってほしいとの思いから参加しました。

【参加してよかったと思える出来事】

ジーンズを1本縫い上げる達成感や楽しさを少しでも感じてもらえたと思えた時。

【プロジェクトに期待していること】

備後全体で盛り上げたい。織、パターン縫製を学べるプロ集団の学校にしたい。

(注1) カイハラ株式会社

(注2) クワダ洗業株式会社

【地域自慢】

相方城跡^(注3)から望む新市町の夜景

② 縫製等に携わるメンバー

有限会社ヤングメンズ 藤本 貴也 代表取締役

【プロジェクトでの担当】：副委員長、スクール運営全般



【プロジェクトに参加したきっかけ】

多くの人たちに、地域の縫製業を知ってもらい、興味を持ってもらうために参加しました。

【参加してよかったと思える出来事】

デニムスクールへ来られた生徒さん全員が喜んで卒業されるのを見た時。

【プロジェクトに期待していること】

デニムスクールを長く続けて、生徒さんにこの地域の繊維業の実態と物作りの楽しさを知ってもらえればと思っています。

【地域自慢】

自然豊かな地域であること

マルカ株式会社 後藤 賢二 代表取締役

【プロジェクトでの担当】：副委員長、スクール運営全般



【プロジェクトに参加したきっかけ】

加富屋の後藤社長に誘われて参加しました。

【参加してよかったと思える出来事】

地域の縫製工場同士で、横のつながりができたことが良かったと思います。

【プロジェクトに期待していること】

HITOTOITOを通じて、より多くの方に縫製に興味をもってもらい、福山の地で繊維の仕事に携わってもらいたいです。

【地域自慢】

夏に行われる天王さん^(注4)のお祭りは迫力があります。ぜひ一度見ていただきたい。

(注3) 新市駅南方面に位置する山頂が削平され整形された山城跡

(注4) 素盞鳴神社（てんのうさん）のお祭りは、例年7月に行われる歴史ある祭り

大江被服株式会社 大江 俊輔 代表取締役 (写真：右)

【プロジェクトでの担当】：スクール運営全般、工場見学の受入れなど



【プロジェクトに参加したきっかけ】

ディスカバーリンクせとうちの方から当プロジェクトの説明があり、このプロジェクトの趣旨に賛同し、参加しました。

【参加してよかったと思える出来事】

この土地の文化や産業、モノづくりに関心を寄せる若い人が意外にも多く刺激になりました。弊社に就職し、そのままモノづくりに携わって下さる方も3名(2022年12月現在)いて、次世代に産業を引き継いでいく一助となっております。また私自身、同業他社の社長や社員と話すことができる貴重な機会が多くあり、見識が深まりました。

【地域自慢】

歴史をたどれば、江戸時代から受け継がれてきたモノづくりが、今もなお産業としてこの地に根差していることに驚きと誇りを感じます。

株式会社 C2 (シーツー) 安原 英弘 代表取締役

【プロジェクトでの担当】：スクール運営全般



【プロジェクトに参加したきっかけ】

委員の方々と親交があり、当社でも国内生産があり国内の縫製業についていろいろと相談している中で、メンバーにお声掛けいただきました。プロジェクトに興味がありましたので、参加しました。

【参加してよかったと思える出来事】

備後の繊維産業や繊維のものづくりに、愛着があったり一生懸命だったりする方々と沢山触れあうことができること。

【プロジェクトに期待していること】

HITOTOITO のプロジェクトの活動が、波紋のように広がることで、思いもよらぬ嬉しいことが起こること。すでに

起こっていますが、ますます広がっていくことを楽しみにしています。

【地域自慢】

繊維産業のものづくりの現場(生地に関係する工場や、製品に関係する工場など)

株式会社エヌ・ディ・エス 中山 貴史 代表取締役

【プロジェクトでの担当】：就職に関わる相談とアドバイス、工場見学の受入れ、スクール運営全般



【プロジェクトに参加したきっかけ】

以前から、縫製技術の継承をどのようにしていこうかと模索していました。そんな中、プロジェクトの話をお聞きして、是非参加したいと思いました。

【参加してよかったと思える出来事】

意外にも、縫製（服作り）が楽しいと思ってる人が全国的に多いことに驚きました。スクール生の方々は皆、真剣にいろいろなアイデアを持ちながらミシンに向かっていて、その様子を見ているだけで感動しました。そんな現場の様子から明るい未来を垣間見ることが出来ました。

【地域自慢】

備後の中でも、福山地区は横の繋がりが強く広く、生地・裁断・刺繍・プリント・縫製・洗い加工・仕上げまで一貫して生産できる日本国内でも最大の産地です。

③ プロジェクトのサポーター

篠原テキスタイル株式会社 篠原 由起 代表取締役（写真：左）

【プロジェクトでの担当】：サポートメンバーとして工場見学の受入れなど



【プロジェクトに参加したきっかけ】

産地の活性化に取り組むプロジェクトの活動意義と使命に共感したことから参加を決めました。

【参加してよかったと思える出来事】

毎年50件以上の工場見学を受け入れてきましたが、デニムスクールに参加する生徒さんは、デニムについて知りたい！学びたい！という熱量が高い方ばかり。逆にエネルギーをいただいています。

【プロジェクトに期待していること】

ディスカバーリンクせとうち^(注5)の黒木美佳さんが嬉しそうに卒業生の話をするがあります。まずは、デニムスクールに参加して良かったと思って貰えることが一番です。

その上で、私たちデニム製造者の遣り甲斐や想いが伝わり、「また関わりたい」と思う方が増えると嬉しいです。この積み重ねが産地を活性化し、ブランド力を高めることに繋がると信じています。

【地域自慢】

- ・国内生産量の半数以上を占めるデニムの生産地。福山市も力を入れてPR中
- ・福山シティFC。Jリーグ昇格に向け奮闘中。弊社のデニムを使った様々なグッズを展開
- ・BOLEEGA（ボレーガ）プロジェクト。フルオーダーの極上の一本を作り上げる企画

(注5) HITOTOITOの事務局を担当（1月号参照）。地元の人とともに郷土愛を持ってまちの未来を真剣に考え、出来ることをひとつずつ実行していくことを会社理念としている

II. HITOTOITO後藤委員長と中国銀行高山支店長の対談

2022年9月12日 於・HITOTOITO 事務所

【出席者】

繊維産地継承プロジェクト委員会

委員長 後藤 和弘 氏 (加富屋株式会社代表取締役)

中国銀行新市支店 支店長 高山 聡 氏

— 人を育てることをおろそかにしてはいけない —

高山支店長：繊維産地継承プロジェクト（以下、HITOTOITO プロジェクト）のきっかけについて教えてください。

後藤委員長：福山市は備後絨で有名でしたが、生活様式や時代の変化に伴い徐々に衰退していきました。新市を中心とした地域は、縫製をはじめ繊維産業が盛んですが、いずれ備後絨の生産と同じ道を辿るのではという危機感があり、何か行動しないといけないという思いがありました。

いろいろな人に相談をするなかで、靴の産地で有名な兵庫県豊岡市における靴の縫製スクールの取組を知りました。豊岡市では地域の産業を守るために、国の補助金なども活用し、縫製スクールの立ち上げており、この事例について勉強したのがきっかけです。

高山支店長：HITOTOITO プロジェクトは、新市地域を中心とした繊維産地を守る思いや人を育てる思いが強いんですね。

後藤委員長：HITOTOITO プロジェクトは、ジーンズを中心としたデニム縫製スクールがメインです。プロジェクトに関わっている私たちは、今現在、ジーンズづくりに困っているかという点、そんなことはありません。モノづくりには自信があるのです。しかし、長い目でみて考えると、結局のところモノを作るのは人であり次の技術者が育っていないことに気付き、人を育てることをおろそかにしてモノばかり作ってはいけないということに気がついたのです。

高山支店長：なるほど。

後藤委員長：繊維の産地だからこその悩みもあります。産地であるがゆえに、繊維産業に関わっている人（過去に関わっていた人）は多いです。実際に関わっている大人たちは、どうしても繊維産業の大変な部分を子どもたちへ伝えてしまいがちです。そうではなく、繊維産業の魅力を子どもたちに伝えていかなくてはなりません。現在、地元の中学校と連携をしながら、課題解決型の授業の一環として、中学生にとって働きたくくなるような縫製工場を考えてもらっています。

— スクール卒業生は100名超、地元で就職する卒業生も —

高山支店長：HITOTOITO プロジェクトのデニムスクール卒業生は100名を超え、1割程度の方が地元就職につながっているとお聞きしました。このプロジェクトは、確実に繊維産業の担い手確保にもつながっていますね。

後藤委員長：スクールに参加される方は、前提として縫製や繊維に興味を持たれています。例えば、



後藤和弘委員長

ハローワークに行かれる方は、求人のある様々な業界を見えています。そのなかのひとつに繊維業界があるということで、必ずしも縫製や繊維に興味を持っているとは限りません。デニムスクールに参加される方は、縫製が好き、繊維産業に興味があるという前提があるうえで、スクールを通じて、現地の人や会社とつながることで、実際の仕事のイメージが付きやすいのではないのでしょうか。

— 地域の担い手を育てたい —

高山支店長：HITOTOITO プロジェクトの経過は、会社の創業、成長と類似しています。会社が創業し、成長し、安定期に入る過程を辿るなかでいうと、HITOTOITO プロジェクトは現在成長期にあるのではないのでしょうか。この成長期の段階では、どうしても様々な課題に直面するので、（地元金融機関として）その課題を解決するお手伝いをしたいと思っています。プロジェクトは単純に規模を拡大すれば良いというわけではないと思いますが、スクールの受講生を増やしていこうという思いはありますか。



後藤和弘委員長（写真：右）と高山聡支店長（写真：左）

後藤委員長：ミシンの数も限られていますし、講師のスケジュールもあります。2カ月に1回、6名での開講を継続する予定ですが、できれば毎回の開講に際して、定員である6名の受講生に参加いただきたいですね。

高山支店長：プロジェクトの目的にも優先順位があり、何を重視するか思いが強いのですね。この地で働いてもらえる担い手を継続して育てるという思いが強いのですね。

後藤委員長：そうですね。現在100名の卒業生で十数名の就職が実現しましたが、1,000名の卒業生を輩出して百数十名の縫製従事者を集められるように活動していける仕組み作りも重要な課題ですね。

— 学校との連携拡大も —

高山支店長：担い手を育てるという目的に対して、手段もいくつか考えられます。例えば、学生向けのプロジェクトの周知活動のようなことはされていますか。

後藤委員長：地元の中学生の授業に関わったことはありますが、それ以外にはないですね。

高山支店長：関心がありそうな学校や専門学校との連携は重要ではないのでしょうか。学校現場では地域や民間事業者との連携は増えています。専門分野での委託授業や放課後の部活動などで連携することは、学校教員の勤務負担軽減にもつながります。お互いウィンウィンの関係が構築できれば、学校との連携が深まり生徒さんの関心も高まることで将来の担い手確保に繋がる可能性があると思います。

後藤委員長：ご指摘の通り重要な視点ですね。素敵な御提案を有難うございます。次の委員会で協議をして学校訪問とかキャリアサポートの先生に我々の主旨や将来像を説明して回れるように提案してみます。

高山支店長：HITOTOITO へ参加される方は、縫製に興味を持たれている場合が多いかもしれません。しかし、縫製に限らず、アパレル全般やデザイン・パターンなど様々なニーズに応えることも大切だと思います。そのため、HITOTOITO プロジェクトへの入口は幅広いほうが良いでしょう。仮に、

このプロジェクトメンバーだけでは提供できないニーズを持った参加者がいらっしやれば、提供できる協力会社や人とつなげばいい。窓口は HITOTOITO プロジェクトが担い、幅広く受け入れれば、参加する側は、参加しやすいのではないのでしょうか。

— 幅広い地域課題の解決につなげていきたい —

高山支店長：少し話題が脱線しますが、電車利用者の減少により存続が危ぶまれてる鉄道路線が増えてきています。福塩線も同じような課題は持っているでしょう。この地域で HITOTOITO プロジェクトのような取組を盛りあげることで、鉄道の利用が増えるということも考えられます。そういう意味では、地元の学校だけに周知するのではなく、幅広く福山市内や岡山県の西部辺りまで範囲を広げて、周知してもいいのかもしれないかもしれません。HITOTOITO プロジェクトの取組は、この地域の繊維業界だけでなく、幅広く地域課題の解決につながる取組だと思います。

後藤委員長：学生への周知は重要である一方、生徒個人の思いは様々で、この繊維業界に就職することが幸せにつながるのか、究極のところ将来のことは誰にも分かりません。私たちは、この地の繊維産業を守るといふ思いで取組を行っていますが、この取組が正解か今は分からない。ただ、そのような思いを持って取組を行っているので、一気にプロジェクト規模だけを拡大するというよりは、着実に同じ思いを持った方々と協力しながら、取組を継続していきたいと思っておりますし、もちろん、地域課題の解決につながっていけばいいと思っております。

高山支店長：何かお役に立てることがあれば我々もご協力していきたいと思っております。本日はどうもありがとうございました。

～おわりに～

先月号と今月号の2号にわたり、福山市新市地域での取組を紹介してきた。

今回の企画における、中国銀行新市支店との共同企画という形態は、当研究所としては初の試みであった。コロナ禍で、県外への取材活動に制約を受けたことがこの形態を検討する1つのきっかけである。一方で、地域にとって身近な存在である地域金融機関の行員にも、一緒に調査活動をしてもらうことで、新たな発見等があるのではないかと期待もあった。この予感はずバリ、的中したとあって良い。企画に参加した行員からは、産地の力を実感し、また、地域の魅力再発見につながったといった声が聞かれた。

当産地の強みは、何と言ってもデニムを川上から川下まで一貫して生産できる体制が揃っていることであろう。実際、各社の代表者からは、モノづくりについての自信にあふれた声を聞くことができた。その一方で、昨今盛んに言われるところの産地の持続的発展という点では大きな課題を抱えている。後継者育成である。この点についても、各社の見解は共通しており、こうした共通の悩みが、今回紹介したプロジェクト「HITOTOITO」の発端となっている。

一口に後継者育成といっても、様々なやり方が考えられる。当産地は他県の産地での取組から、現在のやり方を編み出した。試行錯誤の連続であったと思われるが、ハローワークでの求人ヒット率に比べると、はるかに高い割合で、デニムに関心の高い人材が集まってきたのである。そうした人材の中から、当産地内の企業に就職するケースも出てきており、プロジェクトメンバーは手応えを感じていることであろう。

共同企画に参加して ～中国銀行新市支店～

【プロジェクトの取材に参加して感じたこと】

江戸時代から続く伝統を活かし、縫製に関する工程を一貫してできるなど、新市地域の縫製産業のすごさについて改めて感じました。

工場(作業場)見学を行うことで、スタッフの方々の技術力の高さやものづくりへの熱い思い・深い愛情を感じることができました。「仕事」というよりも「生きがい」として、ものづくりに取り組まれているように感じました。

【この調査レポートを誰に読んでもらいたいですか？】

備後地区へお住まいの方にはもちろんのこと、中国銀行グループの展開地域の方にも読んでいただき、備後地域について詳しく知っていただきたいです。

【銀行員として】

備後エリアをさらに盛り上げるためには、更なる縫製業界の発展が必要だと考えています。その発展に少しでも力になれるように、ソリューション提案をできるよう努力したいです。

【地域自慢】

新市は、吉備津神社^(注6)や素^す蓋^さ鳴^の神社^お^(注7)など、古代からの重要遺跡が多くある町です。また、備後緋の伝統を継承する縫製産業が盛んで、大手デニム製造会社や大手ワーキングウエア製造会社^(注8)が本社を構えています。



岡田優紀支店長代理 (写真：右)
出原睦也さん (写真：左)



石田尚之さん (現・中国銀行国際部)

岡山、広島、香川の3県エリア内には業種は違えど、他にもいろいろな産地がある。当研究所では、今回の共同調査形態を1つのロールモデルとして、今後も、同様の調査企画を進めていきたい。

(当研究所 西村 幸 高本和英)

(注6) 備後一宮吉備津神社は大吉備津彦命を主祭神とし社伝によると、平安時代のはじめ備中吉備津神社より御分霊を賜り、創建されたとされる

(注7) 素蓋鳴神社はてんのうさんとも呼ばれ備後風土記にみられる神話に彩られた由緒正しい古社

(注8) 株式会社コーコス信岡や株式会社自重堂など